

## 第 9 回

### 『寺社勢力の中世』 ～無縁・有縁・移民～ 伊藤正敏、ちくま新書、2008年 (上)

中世の主演は「寺社」だ！

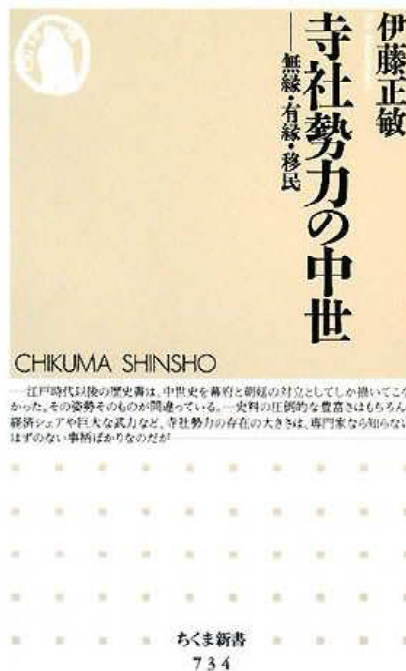
今回取り上げる本は、伊藤正敏氏の『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』（ちくま新書、2008年）です。このシリーズで前回・前々回に取り上げた時代と同じ中世が舞台です。

著者の伊藤正敏氏は、東京大学文学部国史学科を卒業し、東京大学大学院人文科学研究科修士課程を修了されました。一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所文化財調査員、文化庁記念物課技官、長岡造形大学教授などを歴任、現在は研究・執筆活動に専念されています。ご専門が中世史で、研究対象は日本村落史と中世寺社勢力論だそうです。主な著書に、『無縁所の中世』（ちくま新書、2010）、『日本の中世寺院～忘れられた自由都市』（歴史文化ライブラリー、2000）などがあります。

『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』の帯は「中世の主演は、幕府でも、朝廷でもない」となっています。

そこには、「世を仕損なった」人たちが、移民となって流れ込んできました。なぜ人は、有縁の世から逃れ、無縁世界で一時の命を繋ぎ再起を賭けようとしたのか。また、無縁世界が有縁世界に対抗しえたのは、どんな思想、どんな実力によるものなのか。網野善彦や民俗学の知見を批判的に乗り越えつつ、たしかな史料で日本中世を描く。

上記にあるように、中世において、朝廷や幕府以上の存在感を持っていた「寺社=境内都市=無縁所」が著者の研究テーマです。（ただし、このホームページでは「無縁所」については深入りしません）



## 「寺社勢力」とは何か？

伊藤正敏氏は『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』の導入部分で、いきなり仕掛けてきます。

中世になると、王権から、先端文明と先端文化の場である寺院・寺社が分離した。多くの寺社が武力を持ち治外法権を持って独立し、王権に従わなくなった。いわゆる「仏教の民衆化」の時代だ。

祇園祭がそうであるように、伝統文化と言われるものの大半は、中世寺社に起源を持つ。能の創始者の観世は興福寺から出た。生花は延暦寺末寺の池坊六角堂で始まった。茶道、作庭・・・寺社は日本文化の発信基地だった。古代以降脈々と続く文化というものは極めて少ない。南北朝以降、または應仁の乱以後の歴史さえ知っていれば、その前をしらなくても今日の日本文化は分かる、という説があるほどだ。

今日も生きている寺社文化のナンバーワンを1つだけ上げるなら、それは「日本語」である。都市・未来・上品・大衆・商人・観念・道具・投機・脱落・知事・平等・機嫌・世間・・・・ごく普通に使われているこれらの日常語は、・・・・全部仏典から来た。・・・・。

他方、建築技術を筆頭として、石垣普請・庭園築造から弓矢製作・鉄砲生産・築城などの軍需産業に至るまで、先端文明もまた寺社に発生した。このことは余り知られていない。日本文明と文化の大半は、

古代王権からではなく、中世社会から生まれたのだ。

著者は、日本文明と文化の大半が中世社会から生まれたと主張します。「えっ」と、思いませんか？さらに、私たちの常識とは異なる、学界の通説2つについて説明されます。

第一に、中世の開幕とは院政開始（1086年）の頃であり、鎌倉幕府の成立が中世の始まりではない。中世の終了は信長入京（1568年）の頃である。

第二に、古代寺院は、「鎮護国家道場」と呼ばれる国家の安全祈願の場であり、寺僧は朝廷に奉仕するただの役人であって、国家機構の一部だった。奈良時代の弓削道鏡は公務員の立場を逸脱して、個人として権力をふるったに過ぎない。ところが中世寺社は古代寺社とも近世寺社とも全く異なる存在であるため、学会では特別にこれを取りだして「中世寺社勢力」と呼ぶ。東大寺・興福寺・延暦寺・高野山などは古代に創建されたが、中世には完全に変身を遂げた。一例を挙げると、要求を通すために物神の威を背景に、百人から千人もの僧が朝廷に押し掛け、王権を威嚇する強訴が起こるようになる。中世では、公務員でない僧がほとんどとなり、僧侶個人ではなく僧侶集団が力を持った。古代ではどうも考えられない事態である。このような存在は、寺社権力とでも言うのが普通だろう。だが、この集団は明確な組織を持っていない。ローマ法王のような長がない上に、一つ一つの寺社さえも内実はバラバラなのだ。統一されざる巨大・・・権力？・・・それで寺社勢力と呼ぶのである。

1つめは、私が学生の頃は、中世の始めが鎌倉幕府創設で、終わりが室町幕府の滅亡まで、とされてきました。ところが、現在では、鎌倉幕府が創設される前の「院政期から中世が始まる」と言うように変わっています。このあたりは授業でもきちんと説明していますので、大丈夫ですね。

2つめは、中世日本を動かしていたのは、幕府でもなければ、朝廷でもなく、実は「寺社勢力」なんだということです。中世日本には南都北嶺と呼ばれる奈良の興福寺や比叡山延暦寺など巨大寺社が存在し、ここは「治外法権の場」でもありました。また、その活動は社会の営為、特に経済の重要部分を占めていました。延暦寺の領地は、今で言えば北海道や沖縄を除くすべての都府県にあり、鎌倉幕府の領土よりもずっと多かったのです。そしてこの領地は内乱の時などには寺社勢力の拠点になるのでした。

そして伊藤正敏氏は、こんなことも書いています。

朝廷・幕府の文書は、ほとんど残っていない。今日まで残っている文書はほとんど寺社文書だ。朝幕の歴史を年表的に述べようとするときに、500年も後に編纂された歴史書や、ひどい場合には「物語」に依存することがある。これらは断片的ではなく、まとまりを持ち流れもある。・・・だが、真実は完全には分からないものだ。

平安時代の文書の大半を載せた『平安遺文』（東京堂出版）は収録点数約5000通だ。平安時代全体でこの程度。この95%が寺社所蔵文書だ。確実な史料である文書は、ほとんど寺社にしかない。奈良・平安時代の朝廷文書はない。鎌倉幕府文書も1通も残っていない。鎌倉幕府史はゼロからスタートするしかないのだ。

では、朝廷・幕府史は復元不可能かというところでもない。寺社文書に朝幕の法律や命令が偶然残っていることがある。これを材料に鎌倉・室町幕府法の条文を復元するのが常道である。永仁の徳政令の本文は、若狭の百姓が東寺に提出した訴状の添付史料で分かる。土地売買証文の但し書きに幕府法が引用されていて、これにより法が復元できるのだ。・・・・・・・・・・。

鎌倉幕府研究には致命的とも言える欠陥がある。幕府の財政基盤が全く分からないのだ。幕府は御家人たちに軍事奉仕を要求するだけで税などは取らない。幕府の運営は幕府直轄領、関東御領からの年貢を使って行われた。ところが幕府文書が存在しないため、関東御領がどこにあり、年貢率がどうだったかなどの基本的問題が分からない。一方、寺社の財政は分かることの方が多い。寺社文書と貴族の日記によって、幕府の姿はぼんやりと浮かび上がってくるのだ。

えっ、朝廷や幕府の文書は残っていないっ؟!ほんとですか?!

そういえば、『逃げる公家、媚びる公家』や『戦国の貧乏天皇』でも紹介しましたが、登場してくる史料の多くは貴族や僧侶の日記でしたよね。南北朝の動乱や応仁の乱などの戦乱による火災だけでなく、地震などの天変地異などのために、朝廷や幕府の文書は焼けてしまったり、散逸してしまったりしてほとんど残っていないのですね。

ここで少しだけ、教科書にも出てくる中世の有名な史料を確認してみましょう。

鎌倉時代末期に出てくる「永仁の徳政令」の出典は何でしょうか? わかりますか?

答えは、『東寺百合文書』です。

では、地頭の暴政を訴えたことで有名な「紀伊国阿氏河荘民の訴状」の出典は何でしょうか?

答えは、『高野山文書』ですね。

次に、鎌倉幕府の憲法ともいうべき「御成敗式目（貞永式目）」の出典は何でしょうか? これはちょっと難しいですが、わかりますか?

答えは『貞永式目 唯浄裏書本』です。これは、六波羅探題奉行齊藤唯浄が書き記したものです。「御成敗式目」の条文だけではなく、北条泰時が弟の六波羅探題北条重時にあてた式目制定の趣旨を示した有名な手紙も『貞永式目 唯浄裏書本』が出典なんですよ。

建武の新政について批判した「此比(このごろ)都二ハヤルモノ」で始まる「二条河原落書」は何という書物が出典でしょうか?

これも有名ですね。答えは『建武年間記』でした。『建武記』とも言うそうです。著者については定説はなく、建武の新政が崩壊してまもなく成立したものと思われまます。

とにかく、学者の方々が研究したくても、「正確な」「生の」「第1次」史料そのものが少なければ、真実を解明するのは難しいですよ。研究者の方々の苦勞が忍ばれます。

## 「中世」とは？

先ほど、中世という時代について、著者は次のように定義していました。

**中世の開幕とは院政開始（1086年）の頃であり・・・中世の終了は信長入京（1568年）の頃である。**

始まりについても、終わりについても「〇〇年頃」となっており、若干幅を持たしていることがわかります。徳川家康が征夷大將軍になった1603年が江戸時代の幕開けになりますが、そんな特別なイベントや出来事があれば、その時点で「始まり」とか「終わり」とか決めやすくなりますが、そんなうまくはいきません。その点、白河上皇が堀河天皇に譲位をして院政を開始した1086年というのが、わかりやすく良いですね。

伊藤正敏氏が中世の始まりの年1086年頃の具体的な事実として挙げているのが、嘉保2（1095）年という年号です。**この年に何があったのでしょうか？**

**嘉保2（1095）年、山僧の嗾訴があった。初めて日吉神輿を担いでいた。神輿動座（どうざ）の最初である。神輿は神の乗り物であり、動座とは座して決して動いてはならぬ存在、神や天皇が動く異常事態である。祭りの式日に定まった御旅所に行く以外は動かない神が、自ら輿に乗って朝廷に迫り訴える。恐怖の奇跡である。朝廷は内裏への侵入を防ぐため、検非違使と武士に命じて警備させた。関白藤原師通（もろみち）は神輿を射ることを命じた。これは神輿に乗る日吉の神を射ることを意味する。師通は報いとして神矢を眉間に受けて重病になり、母が許しを求めて祈願したがむなしく、その寿命は3年しか延びず、38才の若さで没したと撰聞家では信じられ、恐怖の伝説として受け継がれた。師通の曾孫にあたる天台座主の慈円の『愚管抄』に書かれている。この時世界が変わったのだ！**

**それまで嗾訴など一蹴していた院・貴族が、この「嘉保の神輿動座」以後、比叡山の嗾訴におののくようになる。この2年前の1093年には、興福寺の僧侶が榊に何枚もの鏡をつけた春日の神木を奉じて入洛し、近江国司の春日神人への暴行を訴えている。この頃から諸寺社の強訴は、神輿・神木の動座を伴うのが普通になった。**

上記にあるように、嘉保の神輿動座以後、寺社が中央政界の動向を左右するようになったということです。山法師や奈良法師たちが持ってくる神輿や神木榊によって上皇や公家たちは震え上がっていたのです。上皇や公家だけではないですよ。武士も同じように神輿や神木榊による威嚇に、なすすべがなかったのです。

つまり、**中世とは、「寺社」が強大な「勢力」として力を振るう「寺社勢力」の時代だ**、ということなんですね。

ところで、先ほどから「山法師」のことが出てきていますが、**山法師って何でしたっけ？** 白河上皇の「**三大不如意**」の中にも出てきますよね。

山法師とは、比叡山延暦寺の僧兵のことでしたね。奈良法師は、奈良興福寺の僧兵のことでした。山法師は日吉神社の神輿を担いで京都まで強訴してきましたし、奈良法師は春日大社の神木榊をささげて強訴しました。



← 比叡山延暦寺  
(根本中堂)

興福寺 →  
(東金堂・五重塔)



ちなみに、白河上皇の「三大不如意」、残りの2つは何でしたっけ？

そう、「鴨川の水」と「双六の賽」でしたね。絶大な権力を欲しいままにした白河上皇ですら、山法師たちの「無理難題」には歯が立たなかったのが、中世という時代なのです。

ただし、著者は「面白い」ことを書いています。

神輿の恐怖から自由だったのは誰か？ それは、その神輿・神木・神体を振り回す寺僧・神人だけだ。

上皇や公家、そして武士も畏れた神輿や神木榊ですが、山法師や奈良法師たちも畏れていたのです。

ようか？ 例えば、山法師たちが担いでくる日吉神輿は、比叡山内部ではどのように扱われていたのでしょうか？

著者によると、山法師たちが、神輿動座を阻止されたとき、これを泥の中に故意に振り捨てて汚し、朝廷に丁寧に修理させて受け取ることがよくあったといいます。さらに山法師は神輿の古くなったものを、自らの手でたたき壊したり血で汚したりしたそうです。

なぜ、そんなことをしたのでしょうか？ 目的は何でしょう？

そう。新品を造らせるためですね。

つまり、**山法師たちは神罰など全く恐れていない、ということがわかります。** それに対して、朝廷はこれを「破損穢気（えき）」という汚れと感じ、恐怖を覚えたといいます。

1180年の比叡山の同衆合戦の際には、行人（同衆）が神輿を奪取するとの風聞が広がり、学侶は強訴でもないのに、神輿を根本中堂に避難させます。呪術装置の争奪ゲームです。「物神化」という言葉がありますが、まさに神様はモノとして扱われていますよね。

山法師たちが**神罰を強調することは、神を恐れぬ者が恐れる者に対し、マインドコントロールをするということになります。**

実は、神輿は高額なんです。著者によると、1315年の例で言えば、日吉神輿7基の造営にかかった費用は合計で約6500貫だそうです。祇園会の総経費が300貫なので、21回分に相当します。神輿1基の代金で祇園会を3回することができる計算になります。

では、**6500貫とか300貫というのは、現在の貨幣価値で言えば、いくらになるのでしょうか？**

まず、基準となるのが「貫」です。**1貫=1000文**ですね。室町時代の貨幣価値ですが、だいたい**1貫=10~15万円**くらいと言われています。ですから、祇園会の**300貫**というのは**3000万円から4500万円**くらいになりますね。祇園会の費用としては、無難な数字なのではないでしょうか。

では、**日吉神輿7基の値段6500貫はいくらになるでしょう？**

計算すると、**6億5000~9億7500万円**になります。えっー、神輿7基に6億5000~9億7500万円！！ **1基あたり9300万円から1億4000万円**くらいになります。これって、無茶苦茶、吹っかけていませんか！？ 朝廷の人々は、それだけのお金を出さなくてはならないくらい神罰・仏罰が怖い、ということなんですね。

このように、**中世とは、寺社が、神輿や神木神などを利用して人々を威嚇しながら、強大な力をふるった時代、**ということになります。

さて、著者によると、一般に寺院の内部には、3つの身分があると言います。①学侶、②行人、③聖(ひじり)、の3つです。それぞれの説明を下にまとめておきます。

- ①「学侶」は教学の研鑽、「学」を本務とし、世俗の貴族・武士・富裕民の出身であり、寺内でも特権を主張する。学侶・衆徒・学匠(がくしょう)などと呼ばれる。
- ②「行人」は「行」、寺院や朝廷の公式行事の場で雑役を勤める下級僧侶で、武士より下の身分に出自を持つ。半僧半俗で、世俗の百姓身分に対応し、学侶より一段下位とされる。行人・同衆・法師原(ほつしばら)・夏衆(げしゅう)・花摘などの雑多な名称で呼ばれる。
- ③「聖」は定住地を持たない無縁の人の典型である。寺に定住せず全国を遊行する者が多く、本寺による人的管理はほとんど及ばないけれども、寺院の信仰と権威を背負って、寄付を募り参詣の勧誘をし、その廻国は参詣者の増加につながり、寺社経済は結果として潤う。だから境内都市は聖のコントロール基地とはなっていないが、彼らが広義の寺僧であることは間違いない。山伏も聖と同じである。

ちなみに、高野山には、学侶・行人・聖の実数が分かる史料があるそうです。それによると、高野山が認めた正規の寺僧は約3000名だそうです。上記の3つの身分の構成はどうなっていると思いますか？

長官の検校(けんぎょう)以下の学侶が約400人でした。行人は341人(細かいところまで分かっているのです)、雑務をこなす「雑僧」2236人を合計して約2600人いたそうです。そして、聖は100人で、諸国を廻国中の者の方が多いといえます。上記に書いてなかった「雑僧」という言葉が出てきますね。この人たちが「僧兵」として時に「暴れ」たのでしょう。

さきほどから、著者の文章を紹介していますが、時々、「？」と思う言葉が出てきます。上記で説明した「学侶」「行人」もそうでした。ほかに、「神人」があります。「神人」って何でしょうか？

「神人」とは形式上、下級神官の地位にあり、境内の雑務を行う身分の人たちのことを言います。雑務の中心となるのは警備ですので、彼らは武器を携行します。神社の儀式を司るわけではなく、宗教者のイメージから遠く隔たっています。

また、出家している者が多く、寺院の「行人」も同じです。仏教の教義など知らないし、そもそも髪を剃っていない者も多い。行人と神人は実際上区別しがたいのです。平安時代以降進んだ神と仏を一体とみる神仏習合は、その権威を帯びる僧侶・神人の混淆を生み出していました。

古代に創建された東大寺・興福寺・延暦寺・高野山などが、中世には似ても似つかない存在に変質した理由は、実はこれなんです。寺院のメンバーに大量の「行人」「神人」が加わり、僧侶の構成が根本的に変わってしまった、というわけです。



ここで、1つ追加したいことがあります。

山法師たちが日吉神社の神輿を担いでくる場合を想像してください。彼らは「比叡山」から「降りてくる」という風にイメージしませんでしたか？

実は、それは間違いだそうです。つまり、著者によれば、延暦寺の山法師たちは、六波羅武士（平家）の隣に住んでいて、「年中角を突きあわせている」ようなものだ、というのです。

*強訴・神輿動座という近江の叡山がわざわざ京にやってくるような印象があるがそれは違う。山僧の多くはもともと京に住んでいるのだ。内裏も大内裏も荒廃してしまい、皇居も公家・武家屋敷も不安定に移転を繰り返す中世の京は、不動の中心、叡山末寺祇園社の門前に広がる町なのだ。「叡山門前としての京」と言われるのはこのことだ。*

不覚でした。私は、山法師たちは、わざわざ比叡山から神輿を担いで降りてくるのだ、と思い込んでいました。「ご苦労さんだなあ」と思っていました・・・。

でも、考えてみれば、日吉神社の神輿ですから比叡山に置かれているのではなく、比叡山の麓の坂本に置かれていますから、山から降りてくるわけではないのです。逢坂の関を通過して来たんですね。

次回に続きます！！